

「緑字企業報告書 2010」に対する意見



関西学院大学商学部教授

阪 智香 (さか ちか)

日本学術会議連携会員
日本社会関連会計学会理事
大阪府環境審議会委員

■はじめに

緑字企業報告書2010では、トップメッセージ、事業の概要、特集に続いて、ステークホルダー別に、環境活動、社会活動、従業員関連、コーポレート・ガバナンス、コンプライアンスについての活動的・確かな要約と実績が記載されています。宝酒造の企業理念に基づく活動の特徴がよく出ており、親しみやすく読みやすい構成であるとともに、誠実な活動内容が伝わる報告書であると思います。

とりわけ、1998年に最初の報告書を公表されてから、継続して算定されている緑字決算は、各年度の宝酒造の環境・社会活動への取り組みの総括ともいえます。緑字決算を通して、目標のレベルアップとその達成に継続して取り組み、毎年の成果を具体的な数値として公表し、さらに次の取り組みにつなげる仕組みは、活動をより一層積極的に確実なものにする原動力となっていると推察されます。

■内容について

●長期的なビジョンについて

企業理念・行動規準と3カ年の環境中期目標が、とてもわかりやすく示されています。一方で、特に環境問題などは長期的な目標からバックキャストしていくことも大事ですが、長期目標が報告書に示されていないために、長期的な視点からの方向性が見えにくくなっています。

中期目標の基になる長期目標や、中期目標についてはISO14001環境目標以外の社会・社員・企業体制に関する包括的な目標も併せて示してもらえたなら、「企業理念→行動規準→方針→長期目標→中期目標」へと具体的な目標にどのように落としこまれているか、実績と対比による現状の位置が理解できるようになるのではないのでしょうか。また、今回の特集で取り上げられた「安全・安心」や「生物多様性」が、長期目標や中期目標ではどのように位置づけられているかも、見えるようになると思います。

さらに、環境目標が事業プロセスにどのように統合され

ているかについても知りたいと思います。活動が一定のレベルに達した後、そこからさらに進展させるためには、これまでとは違った工夫も必要になってくるでしょう。例えば、環境負荷削減と設備投資等のコスト増のトレードオフをどのように解決するかといったときに、適切なコスト・ベネフィット分析が必要となるでしょう。

●特集について

特集やトピックスは毎年変更するなどの工夫がなされています。今回の特集のうち、生物多様性は、根気強く継続して取り組まなければならない課題です。生物多様性はここ数年で注目されてきましたが、宝酒造では、TaKaRaハーモニストファンドを通じて25年にもわたってのべ260件の研究と活動に助成をされています。その地道な取り組みとこれまでの成果の蓄積は、社会的な財産であると思います。

●環境について

環境方針・環境マネジメント、緑字決算、環境目標、4Rについての記載を通じて、宝酒造の環境活動の全体像と重点を知ることができます。緑字決算の項目や目標は、全社的なISO14001環境目標とリンクしており、項目やECO算定の基になる目標値は、3年ごとに見直しながされています。最近では、CSR関連項目が追加されているのが特徴です。そして、毎年の達成状況を基に、中期計画の途中であってもハードルをさらに高くするなど、可能な限りレベルアップさせた取り組みが実施されています。また、緑字決算の重み付け係数が社外の1万名のアンケートにより決定されることによって、環境活動の中に社外のステークホルダーの声を反映し、環境活動の適切な方向付けがなされていると思います。

●社会について

社会活動のひとつとして実施され、また、CSR報告書に名称が変わってから毎年表紙に掲載されている「TaKaRa 田ん

ぼの学校」での、子供たちのいきいきとした笑顔がとても印象的です。社会の「宝」である子供たちに、単なる農作業体験ではなく、自然の恵みや生物多様性を肌で感じる「教育」を提供されていることを、素直にうれしく思います。

●その他

各年の緑字企業報告書にすべてを求めることは適切ではありませんが、過去の報告書にも記載のあった海外事業における取り組みを含む宝グループの取り組みについての全体像に関する情報開示があれば、読者に活動の全体を知ってもらうことができ、より包括的な報告となるのではと思います。

■最後に

会計や決算の数値は、私たちの豊かさの指標として、現実世界のさまざまな意思決定や資源配分に用いられています。しかし、私たちの豊かさには直結するはずの「環境」が経済システムから切り捨てられてきたために、利益の追求が環境問題を生み、ひいては人間の生存基盤そのものが危機にさらされようとしています。このような、従来への会計に対する挑戦のひとつが宝酒造の緑字決算であると思います。

企業活動の指針として、アニュアルレポート上の利益(ボトムライン)とともに、社会・環境活動への取り組みの成果を総合的に示す緑字決算(もうひとつのボトムライン)をもつことで、経済・社会・環境にバランスよく配慮することができ、従来の企業行動や経済活動の方向性を変える力をもちます。1998年から継続されている緑字決算が今後も継続されるようエールを送るとともに、宝酒造の一滴(取り組み)の波紋が広がるように、他の企業においても、新たなボトムラインを探る動きや持続可能な経営へのシフトを呼び起こすことにつながればと願っています。

表紙について

この写真は、当社の主催する社会・環境プログラム「TaKaRa田んぼの学校」〈草取り編〉で撮影されたもので、参加された皆様が草取りを体験しているところです。私たちは、このいきいきとした表情から、「皆様のいきいきを実現する企業」であり続けたいと願う当社の想いがより伝わると考え、表紙写真に選定しました。



編集後記

本報告書では、一企業市民として、社会のさまざまなステークホルダーの皆様との関わりをご報告しています。本年度は特に、次の2つのテーマについて、特集でご紹介しました。

一つめは、「食の安全・安心への取り組み」を特集テーマに選びました。これは2010年3月に一般の皆様及び当社社員に対して実施したアンケート調査(有効回答数756件)の中の設問「特集記事として取り上げて欲しい項目」(複数回答)で、全体の約6割と最も要望が多かったためです。

二つめは「生物多様性保全への取り組み」です。今年度が生物多様性年であり、2010年10月には生物多様性に関する国際会議(COP10)が名古屋で開催されることから、生物多様性保全に関する皆様の関心が高まるものと考え、このテーマを選びました。

また、昨年の報告書の第三者意見でいただきましたご意見を参考に、お客様相談室に寄せられるご意見の内容や、それがその後どのような改善に結びついたのかという具体的な事例を新たに紹介するなど、報告内容の改善に努めました。

今後もより有効かつ有意義な活動の展開をめざすため、皆様方からの当社の企業活動、環境活動に対するご意見をお待ちしております。よろしくお願い申し上げます。

編集体制

- ・環境統括会議(宝ホールディングス(株)・宝酒造(株) 役員、グループ会社社長 計13名)
- ・編集委員会(CSR推進部門、広報部門、経営企画部門、総務人事部門、営業部門、商品開発・宣伝部門、購買・製造部門、品質保証部門、お客様相談部門、環境部門、宝ホールディングス(株)IR部門 計14名)
- ・編集責任者:中尾 雅幸(環境課長)

発行責任者:佐藤 浩史(環境広報部長)